

公開講演会

東南アジア史研究を振り返る

— 地域研究と交流史研究 —

弘末 雅士

はじめに

東南アジア史研究が本格化したのは、第二次世界大戦後である。それまでもこの地域は、植民地宗主国による王朝研究や植民地史研究、さらに東洋史学の東西交渉史研究の対象となった。しかし、東南アジアを主語に据えた研究はなかった。近現代の東南アジアは、欧米の植民地支配(タを除く)、日本軍による占領、独立国家の形成、国民統の行き詰まりとグローバル化など、多様な変化を体験した。歴史研究もこうした動向と無関係でなかった。

東南アジア史研究が本格化した時期、ベトナムが世界の目を引いた。ホー・チ・ミン率いるベトナム民主共和国独立に異を唱えたフランスは、第一次インドシナ戦争に

突入した。一九五四年のジュネーブ協定により北緯17度を境に南北ベトナムが分立し、一九五六年に統一のための全国選挙が実施されることが決まった。しかし、選挙は実現せず、フランスに代わってアメリカが、南ベトナムを支援し、ベトナム民主共和国を相手にベトナム戦争を始めた。一九七五年にサイゴンが陥落し、南北が統一されるまで戦争は続いた。

ベトナム戦争は、東南アジア史研究にも少なからぬ影響を与えた。本格化した東南アジア史研究は、植民地史観を排し、東南アジアの主体性を重視した研究を目指した。地域の構造的性質の解明を目指す、地域研究の方法論がそれに寄与した。旧植民地宗主国に代わり、アメリカが東南アジア研究をリードした。また日本でも、一九六五年に京都

大学東南アジア研究センターが設立され、翌六六年に東南アジア史学会が誕生した。筆者が東南アジアに関心を持ったのも、ベトナム戦争の時代であった。当時反植民地主義運動が注目を浴び、一九七〇年代に研究を志し、八〇年代に博士論文を提出するまで、植民地期インドネシアの内陸農村におけるそうした運動を研究対象とした（弘末一九八一、一九八八）。

地域研究と東南アジアの政治文化

ベトナム以外の東南アジア諸国にも、高い関心が払われた。東南アジアの国家領域は、多くが植民地国家の枠組みに基づいており、多様な民族や社会集団を抱えた。国民統合の道のりは、決して平坦でなかった。インドネシアでは、オランダからの主権委譲後も、イスラーム国家樹立を唱える運動や地域反乱が起り、政情は不安定であった。これに対しスカルノは、一九五〇年代後半より西欧民主主義を否定し、「指導された民主主義」を標榜し、民族主義、イスラーム、共産党の勢力を結集させようとした。その後、一九六五年の九・三〇事件により反共を掲げたスハルト政権が成立し、国軍の力を背景に、経済開発を掲げて強権的な独裁政治を展開した。

同様な事例は、タイでも展開した。一九五七年にピブーン政権をクーデターで打倒した軍人のサリットが、「タイの原理の政治」を掲げ、経済開発を標榜し独裁政権を樹立した。またビルマでも、一九六二年に国軍のネイ・ウインがクーデターを起こし、「ビルマ式社会主義」を標榜し、議会制民主主義がビルマを混乱させたとして、議会を解散させ、強権的政権を樹立した。

こうした西欧型民主主義を否定したリーダーの理念を、当該の政治文化をとおして理解しようとする研究が進展した。それによると、スカルノはジャワの政治文化で重視されてきた人民の英知を自ら感得できることを唱え、人民に導かれた「民主主義」を標榜したことが明らかにされた（土屋一九八二）。またタイにおける一九三二年の立憲クーデターからサリットのクーデターにいたるまで、数回のクーデターが生じた政治過程は、タイ政治をつらぬく権力法則にもとづく権力授受現象であり、リーダーの社会的循環はきわめて流動性に富むが、治者と被治者との関係はタイ的政治文化原理により、極めて安定していることが示された（矢野一九六八）。またビルマ式社会主義は、従来の社会主義と異なり、物質よりも精神を重視し、共産主義の前段階でなく最終段階の理想的体制であり、ビルマの宗教や文化に合致していることが議論された（田村一九八七）。

東南アジア史研究を振り返る（弘末）

こうした政治文化の研究は、それらを生んだ民族主義運動や前近代の東南アジア国家の検討にも反映した。民族主義運動のリーダーが、国民国家樹立を大衆にアピールするために、民族意識と在来の価値観をいかに接合させたかは、重要な研究対象となった。フィリピン民族意識の形成に、フィリピン民衆の間で広まっていたキリスト受難詩が重要な役割を担ったこと (Ileto 1979) や、諸勢力の結集を重んじるジャワ人の伝統的権力概念が、インドネシア民族主義運動のリーダーの政治理念に反映されたこと (Anderson 1972) の研究などは、その代表である。

また前近代の東南アジアは、周辺地域に比べると人口過少地域であり、強権的な統一権力による支配が実現されにくかった。ここでは、諸勢力をゆるやかに束ねる統合が目指された（坪内 一九八六）。国家を樹立するために、権力者は軍事力よりもカリスマ的権威をもとに、影響力を行使した。こうした諸勢力が分立するなかで権威中枢を形成する国家を、マンダラ国家と呼ぶ (Wolters 1982)。また支配者は、人々を引きつけるために儀礼を重視した。バリ島の前近代の国家の存在理由を、支配者が人々とともに劇を上演することとする「劇場国家論」(Geertz 1980) や、マレー人支配者が宮廷儀礼をとおして内と外を秩序づけ、タイトルの授与をとおして君臣関係を形成するとして

王国論 (Milner 1982) などが、登場した。

交流史研究からみた東南アジア

こうした地域の構造的特質を解明してきた東南アジア史研究に、一九八〇年代後半以降、その特質を周辺地域との交流をとおして検討しようとする動きが台頭した。ヒト・モノ・カネが地球的規模で動く、グローバル化が一九八〇年代以降著しく進行したと無関係ではない。八〇年代以降、民主化運動や金融危機による独裁政治体制の崩壊が、東南アジアで起こった。東南アジアの政治文化も、周辺世界との関係のなかで展開したのであった。

国境を越えた交流史が、注目され出した (Reid 1988, 1993; Kathirithamby-Wells and Villiers 1990)。東南アジアは、東西海洋交通路の要衝にあり、古くから海洋貿易活動が盛んであった。とりわけ香辛料や森林生産物を求めて多数の商人が来航した近世期、東南アジアの産品を輸出する港市が各地で隆盛した。港市は、東西世界や周辺港市の商人が逗留するコスモポリスとなった。港市支配者は、外来商人と商品を搬出する地域住民を仲介することを、権力基盤とした。また東南アジアの産品を効率よく東西商人に商うため、城内港市間のネットワークが強化された。東

南アジア海域世界に共通の商業慣行や社会文化が広まった。港市の台頭により、広域ネットワーク、東南アジア海域世界、内陸後背地社会が形成されたのである。

筆者が研究対象とした内陸農村は、そうした港市の後背地であった。港市に商品作物や森林生産物を搬出するなかで、それを支える農業空間が形成された。そこでは、山や水、祖霊に対する信仰が発展をとげた。そうした港市と後背地の相互の関係が、植民地体制下で変容を余儀なくされ、反植民地主義運動が生じたのであった。内陸社会の特質を周辺港市との関係をとおして検討することや、近世から近代にいたる長期的プロセスのなかで考える必要性を喚起させられた（弘末一九九三）。

ヨーロッパ人も、近世に東南アジアに来航した一勢力であった。ともすれば、彼らを一九世紀終わりの植民地支配者と同様に捉えがちであるが、一九世紀半ばまでの彼らは、概して現地人支配者と共存関係にあった。またスエズ運河が開通するまで、来航したヨーロッパ人の多くは単身赴任者で、現地人女性と家族形成することが珍しくなかった。彼らの生活は、現地人妻妾や彼女が差配する使用人に支えられ、ヨーロッパ人コミュニティ構成員の多くは、クレオールやメステイーン（欧亜混血者）であった。ヨーロッパ人と比較的長く交流してきたフィリピンや東インド（インド

ネシア）で欧亜混血者は、植民地支配者と現地社会をつなぐ重要な役割を担った。やがてヨーロッパ本国の影響力が一九世紀後半に強く及びだすと、欧亜混血者のうちからそれに對抗して、フィリピンや東インドを祖国とみなす活動が生起してくるのである（池端一九八七；Bosma and Raben 2008）。

歴史研究者は、時代のなかで研究の足場を形成する。しかし、時の経過とともに、パラダイムの変化に遭遇する。東南アジア史研究における地域研究から交流史への変化も、少なからぬ研究者にその立脚点を再考させたであろう。研究者にとっては、スリリングな局面を迎えるが、その転換を丁寧と考えていくと、研究上有益なヒントを得る。地域研究と交流史研究は、地域の歴史的展開を検討する上でともに不可欠なものであり、交流史研究も地域の特質を解明してきた地域研究の蓄積があればこそ、地域間の交流のあり方に、説得的な議論を提示しうることに気づかされる。それが不十分であれば、単なる概観的交渉史に過ぎなくなる。地域像の主体化と相対化は、ともに欠かせない重要な課題だったといえる。

パラダイムの転換と歴史研究者―結びに代えて

交流史研究と地域研究を丁寧突き合わせていくと、地域研究が目指してきた地域の特質と、交流史研究から明らかになる広域秩序世界を、媒介的に捉える視点を獲得できる。広域ネットワークを形成しつつ、外部への窓口となることで地域社会の結節点となった港市は、地域社会と広域秩序の構築に、重要な役割を担った（弘末二〇〇四）。また上述したように外来者は、多くが単身赴任者であった。東南アジアには、外来者に対して現地人妻妾を斡旋する慣習が広く存在した。彼女らやその子孫たちは、外来者と現地社会を仲介する役割を担った。オランダ領東インドにおいてオランダ植民地支配が、一九世紀後半まで比較的安定的に維持できたのも、こうした存在に支えられていたからであった（Taylor 1983）。

こうした女性の役割は、東南アジアの王統記にも反映されている。近世の代表的王統記である『サイ王国物語』やマラッカ王国の『スジャラ・ムラユ』、マタラム王家とオランダ人の関係を語る『パロン・サコンダルの書』は、王国の滅亡やオランダのジャワ進出には、いずれも女性が関与したとする（弘末二〇一七）。王の周辺にいる女性達は、外来者との重要な交流役であった。支配者がそうした

女性と摩擦を起こし、君臣下関係を崩壊させたり、彼女らをぞんざいに扱うと、王国が滅亡することを王統記は説く。彼女らは、一方で現地人支配者の影響下に有り、他方で外来者とも関係をもつが、どちらの側も彼女を一元的な影響下におくことはできない。そこに彼女だけが関与できる、内と外を関係づける主体性が生じる。王統記は、王が臣下の活動に寛容であることの重要性を説く。

民族主義運動のリーダーとなった、欧米の政治思想と地の価値観を接合した二重言語者も、そうした内と外の仲介役であった。本誌冒頭の「史苑の窓」で述べたように、植民地支配への対抗原理となる民族意識の形成は、きわめてハイブリッドな空間でなされた。一九八〇年代までの東南アジア研究は、農村社会の研究を重視してきた。しかし、こうした人々が集った都市の研究が重要であることは、言うまでもない。

国民国家に代わる枠組みや世界秩序が模索され始めている今日、内と外を媒介する存在は、媒体の役割も含め、重要な検討課題となる。上述したように、東南アジア諸国の多くが、植民地時代の領域を基盤にしている。ただし、いったん民族意識が形成されると、ハイブリッドな社会空間は後退し、多くの地域で外来系住民との間で確執が生じた。なぜそうなったのか、上述した人々の役割や都市の社会統

合の観点から、改めて検討することが求められる。とりわけ外来者と家族形成した現地人女性が少なからず存在した社会において、ジェンダー関係がいかに変容したかは、重要な研究課題となる。国民国家に代わる新たな枠組みが出てくる時、いかなる秩序が志向されるのか、そうした作業からヒントを得ることができよう。

今日、世界的規模でヒトやモノの交流はますます進展している。グローバル・ヒストリーの重要性が提起される一方で、地域の立脚点から世界を検討することの重要性も議論されている。さらに国民国家の枠組みを再評価する動きも見られる。いずれにせよ、時代の変化とともに新たなパラダイムが台頭する。また東南アジア史研究は、欧米だけでなく、東南アジアをはじめ東アジアや南アジアの諸地域、さらにはオセアニアでも進展をとげている。人と同様、地域によってその研究に特性がでてくる。パラダイムの変遷と諸地域で進展する研究を丁寧検討する時、歴史研究を現代に活かしていくための、貴重な視座を得ることができるのである。

引用文献

- Anderson, Benedict R. O'G.
1972 "The Idea of Power in Javanese Culture", Claire Holt (ed.), *Culture and Politics in Indonesia*, pp.1-69, Ithaca and London, Cornell University Press.
- Bosma, Ube and Raben, Remco
2008 *Being "Dutch" in the Indies: A History of Creolisation and Empire, 1500-1920*, Athens, Ohio University Press.
- Geertz, Clifford
1980 *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*, Princeton, Princeton University Press.
- (邦訳『ヌガラー19世紀バリの劇場国家』(小泉潤二訳)、『みすず書房』一九九〇年)
- 弘末雅士
一九八一 「中央スラウェシ・トラジャ地方の社会変容と宗教—19世紀末から20世紀初めにかけての東トラジャ族の事例を中心として—」『東南アジア—歴史と文化』一〇号、一四二—一七三頁。
- 1988 "Prophets and Followers in Batak Millenarian Responses to the Colonial Order: Parmalim, Na Siak Bagi and Parhudadam, 1890-1930", (Ph.D. Dissertation submitted to the Australian National University, 1988).

東南アジア史研究を振り返る（弘末）

- 一九九三 「北スマトラにおける港市国家と後背地」『東南アジア—歴史と文化』二二二号、三—三五頁。
- 二〇〇四 『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序』岩波書店。
- 二〇一七 「女性の神話化—東南アジアの王統記が語る王国の滅亡と女性—」『歴史学研究』第九五九号、二五—三五頁。
- 池端雪浦
一九八七 『フイリピン革命とカトリシズム』勁草書房。
- Ileto, Reynaldo Clemeña
1979 *Passion and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Manila, Ateneo de Manila University Press.
- Kathirithamby-Wells, J. and Villiers, John (eds.)
1990 *The Southeast Asia Port and Polity: Rise and Demise*, Singapore, Singapore University Press.
- Milner, Anthony C.
1982 *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*, Tucson, The University of Arizona Press.
- Reid, Anthony
1988 and 1993 *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, 2 vols, New Haven and London, Yale University Press.
- 田村克己
一九八七 「△伝統△の継承と断絶—ビルマ政治のリーダシップをめぐる△」伊藤亜人・関本照夫・船曳建夫編『現代の人類学3△国家と文明への過程△』東京大学出版会。
- Taylor, Jean Gelman
1983 *The Social World of Batavia: European and Eurasian in Dutch Asia*, Wisconsin, The University of Wisconsin Press.
- 坪内良博
一九八六 『東南アジア人口民族誌』勁草書房。
- 土屋健治
一九八二 『インドネシア民族主義研究—タマン・シスワの成立と展開—』創文社。
- Wolters, Oliver W.
1982 *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies.
- 矢野暢
一九六八 『タイ・ビルマ現代政治史研究』京都大学東南アジア研究センター。
(本学名誉教授)